

2025年10月5日 第二礼拝

説教題『口を開けば「キリスト」』使徒言行録 11 章 19～26 節

主任牧師 加藤 誠

「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである」(使徒言行録 11:26)

アンティオキアは現在のトルコ南部に位置する、シルクロードの西側の出発地として栄えた大きな都市でした。この街の片隅に「イエスをキリストと信じる人々」が次々に起こされ、世界で初めて「キリスト者」(クリスティアノス＝キリストに属する者)と呼ばれるようになります。それまでは「ユダヤ教のナザレ派(＝ナザレのイエスを教師として信奉する人たち)」と呼ばれていましたが、「もはやユダヤ教の枠におさまらない新しい信仰だ」と認識されるようになったようです。十字架で殺されたイエスを「キリスト(救い主)」と仰ぎ、ユダヤ教が大切にする安息日ではなくキリストが復活した日曜日に集まっては「十字架のキリストの命」をあらわすパンと葡萄酒を分かち合う奇妙な礼拝をささげている。「キリストにおいて、もはやギリシャ人もユダヤ人もない、男も女もない、奴隷も自由人もない」と「すべての人が神に等しく愛されているエクレシア(教会)」という集まりを喜んでいる。あの連中は口を開けば「キリスト」という不思議な連中だと。ですから最初「キリスト者」はあだ名でした。しかしアンティオキアの教会の人々はそのあだ名を喜んで受け取り、自分でも「私たちはキリスト者(キリストのもの)です!」「キリストに日々生かされている者です!」「キリストの十字架により罪赦され、復活の命をいただき、終わりの日の希望に向かって生きる。キリストのものとして生きる幸いをいただいた者です!」と自己紹介するようになったのでした。

実は 17 世紀の英国に生まれた「バプテスト」も最初にあだ名でした。当時、信仰と言えば「英国国教会」の信仰のみ。国民は生まれるとみんな自動的に(強制的に)洗礼を受けてクリスチャンとされ、自分の住所地の教会に所属する。それ以外の生き方が認められない社会にあって、「信仰は自動的強制的なものではないはずだ。自分の口でキリストの救いを告白し、自覚的に集まった者たちで教会が建てられるべきだ」と言い始めた。そして聖書にある通り、自分でキリストを救い主と告白した者が水の中にぎぶんと沈められるバプテスマを実践し始めたところ、「あの連中はバプテスマ、バプテスマと言って、幼児洗礼を否定する、みんなと違うことをする危ない連中だ」と言って「バプテスト」と呼び始めたのです。しかしそのあだ名を喜んで受け取り、「私たちは自分で主体的にキリストを信じるバプテスマを大切にする教会です」といって自ら「バプテスト」と名乗り始めたのが、最初のバプテスト教会だったのです。

さて、使徒言行録 11 章には、アンティオキアの「キリスト者」たちがキリストから

受け取った喜びに生かされていた様子が浮かび上がってきます。例えば最初、主イエスの弟子たちは旧約聖書を知っているユダヤ人以外には御言葉を語っていなかったのに（19 節）、アンティオキアではユダヤ人以外の人々にもどんどんキリストを紹介し、福音を語り始めた（20 節）とあります。キリストの十字架においてユダヤ人と異邦人の隔ての壁は壊された。キリストはユダヤ人だけでなく、すべての人の救いだ。この主のもとで私たちは「一人の新しい人」に造り上げられていこう！…という喜びを、アンティオキアの教会は即、実践していたのです。

また 21 節に「主がこの人々を助けられたので」という言葉は、直訳すると「主の御手がこの人々と共にあり」です。人と人との関係においても、手を通して人のぬくもり、愛や励ましが伝わるように、アンティオキアの人たちは自分たちの歩みに添えられた「主の御手のぬくもり」を身近に感じ取る信仰をいただいていたようです。彼らの周囲には、さげすみや偏見のまなざしがあふれていたと思いますが、共にある「主の御手」の愛と励ましに力づけられながら、御言葉を伝えていったのです。

またエルサレムから派遣されてきたバルナバは、アンティオキア教会がユダヤ人の枠を超えて異邦人と一緒にキリストの教会を建て上げている姿を見て、「神の恵みを与えられた有様を見て喜び」（23 節）励ましました。先ほども触れたように、ユダヤ人と異邦人が一緒に教会を建て上げることは前例のない実験的な試みでしたが、それを「神の恵み」として受け止め喜ぶことのできたバルナバの信仰の深さを示されます。そしてバルナバはわざわざタルソまで行ってサウロを見つけて連れてくるのです。キリストの弟子とされたものの、教会の人たちから警戒されて遠ざけられていたサウロのことがバルナバはずっと気になっていたのでしょう。「このアンティオキア教会ならサウロの個性と経験が生かされる！」。私たちは視野の狭さのゆえに「神の恵み」を「神の恵み」として見い出せない弱さを持っていますが、バルナバのように「神の恵み」を見つけていく信仰が人間的な恐れや不安を乗り越えさせて、教会を主の御業に励まし建てていく姿に深く教えられます。

アンティオキアで「キリスト者」とあだ名で呼ばれた人たちは、やがて自分たちから「私たちはキリストのものとされたキリスト者です！」と自らを語る者とされていきました。キリストの救いにあずかり、キリストの愛と希望に励まされ、日々「主の御手」と「神の恵み」を見出して歩む者。キリストによって生かされ、隣人とつなげられて歩む喜び。私たちも「キリストのもの」とされる喜びをもって自らを紹介していきたいのです。今日はこのあと主の晩餐式にあずかります。十字架の主の恵みは、ユダヤ人もギリシャ人も、男も女も関係なく、すべての人に差し出されていて、「わたしに従ってきなさい」という主の招きを受け入れるなら誰もが与ることのできる食卓です。「キリストのもの」とされて生きる幸いをご一緒に受けていきましょう。